

法学部
政治学科
村田晃嗣ゼミ
(三年次)

現代社会を動かす 生きた国際外交を学ぶ

村田ゼミの授業は、毎週一人が指定テキストを元に発表し、これに対する質問に答える形で進行。最終的には自分の選んだテーマに沿ってレポートをまとめることになる。ゼミ生たちの関心は、もっぱら戦後の東アジアを中心とした安全保障に集まっているようだが、村田先生は、外交は歴史の中から基礎を学ぶことが大切だ。ゼミではその基礎を共有しながら、今日国際社会で展開している外交について考えてみたいと話す。今回は、ゼミ生の中から有志五人が集まっていた。外交史について話し合ってみよう。



村田 晃嗣
(法学部助教授)



奥野 彩子さん



本多 宏江さん



村瀬 正臣さん
(四年次生)



石井 久美さん



井上 恵さん

ぐるしく変化していますね。とくに近年は一年違つと様相が一変するくらいの激動の時代を迎えています。こうした変化は学が上で面白い反面、将来はどつなるんだらうという不安感を抱かせます。私はこうした外交を学ぶことにより、よりよい未来を描き出せないものかとのゼミを選びました。

奥野 私はずっと日米安全保障に興味を持っていました。中学校、高校とも戦争教育に熱心で、戦争をテーマにした演劇をやったりしていたのですが、戦争責任は一方的に日本にあるものと教わりました。私は、果たして本当にそうなんだらうかと疑問を持ち続けていて、大学ではいろいろな角度から戦争や安全保障の問題を考えてみたいと思っています。

石井 私は、一年次に「国際交流論」を受講して国際政治について面白そうだなあと感じていました。でも外交史を学ぶきっかけになったのは、茶道部のご出身だという村田先生の政治学演習を受講してからです。ちなみに私と井上さんは茶道部です(笑)。

井上 私の中学校、高校にはカンボジアの方

が何回かお見えになり、地雷撤去の講演をされました。手足がなく、車椅子生活を余儀なくされていましたが、その方が、戦火の中でも国を愛し、荒廃した祖国を捨てることなく危険な地雷撤去作業に従事した心情を思い測りながら、国際政治の波間で犠牲になった人々の悲劇を感じました。外交における駆け引きとは、冷戦構造下における米ソのように力を持つ者が行うもので、弱者はそれに翻弄されて生きていくしかないのだらうかと考えさせられました。

村瀬 私はその駆け引きこそ外交の面白さがあると感じています。表面上はきれいに纏いながら、水面下では、きつねとたぬきの化かし合いを行うのが外交術であり、キョウバ文化が生み出したものではないでしょうか。東洋の価値観、とくに日本人の価値観からすると駆け引



きはなかなか受け入れ難いものです。しかし、インターネットやe-ニュースなどで国際社会がポータルになってきた今日、日本人もそろそろ外交における駆け引きを学ぶべきだと思います。

石井 確かに日本の外交は弱腰で、いつも負けている印象があります。日本人としてとても悔しい思いもします。そこで駆け引きについて考えてみると、井上さんが強者間で「そ成り立つ」と言われましたが、そう単純ではない。弱者には弱者なりの振る舞い方があり、例えば日本には経済面の影響力を使えば米國とも渡りあえないことはない。なぜそれができないか。あるいはなぜ米國が外交でつねに指導権を握れるかを考えてみると、彼らが冷戦構造の中で外交力を最大限発揮する方法を学んできたからだと思います。

井上 李登輝前台湾總統の訪日問題でも日本の外交は腰が定まらなかったですね。村瀬 中国のやり方は明らかに内政干渉だと思えます。今回の訪日要請は医療目的であ



り、人権上の問題だからと空っぽなればよかったのです。

奥野 中国の反対に会えば、ビザ申請は受け取っていない」と言ってみたり、結局ビザを発行したりと、外務省の姿勢には一貫性がありませんでした。米國では、公人も公職から六カ月以上離れていれば私人と見なされま



すから、他國が干渉しようが入國を許可します。ところが、日本は前例のないものにはなかなか決断ができない。規範を守っていくには長けているのに、本多 一貫性がないのは、外交の方向性が定まっていなからだと思います。日本が国際社会の中でどう生きていくかがはっきりしないまま、他國との協調を大切にしようとする。結果、今回のように日中関係、日台関係の双方にじりを残してしまっ

た。村瀬 米國のように利己的に振る舞えばいいんです。國益を中心に考えれば、外交方針もはっきりします。村田 國益を中心に考えれば、李登輝さんの訪日はお断りするべきでしょうね。日中貿易と日台貿易を比べれば、明らかに日中貿易を重視する方が國益にかないます。そもそも今回外務省が李登輝さんの入國を許可したのは、人権に配慮したからなのでしょうか？

石井 マックス・ウェーバーが、心情倫理と責任倫理という形で区別していますが、医療目的だからということなら心情倫理に基づく判断だと思います。しかし、政治の世界は責任倫理において行われるべきで、導かれる結果に対して責任にかなうかが問われるべきです。一人一人の命に関わることも、中国が反対するのは中国なりの責任倫理に基づく判断があったと考えるべきだと思います。

村田 そうですね。先ほど日本の外交には一貫性がないという意見がありました。一貫性がないのは米國も同じです。一九九六年の李登輝さんの訪米にあたっては、クリントン政権は入國を拒否しました。しかし、議会在賛成したため、その妥協として入國を許可したのです。皆さんに考えていただきたいのは、現在行われている外交はまだ評価が定まりませんが、過去の出来事についてもそうなんです。ただその中でも、国際政治を動かしている変わらない要因というものがあ